OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Proust の芸術的本質を表わすイマージュと作品構造 : 内容と形式の一致
Author(s)	長谷川, 富子
Citation	Gallia. 1971, 10-11, p. 215-230
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11649
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Proust の芸術的本質を表わす イマージュと作品構造

——内容と形式の一致——

長谷川　富子

序

19世紀後半の科学主義，実証主義の風土の中で，知性による客観的認識は，主体と如何なる関係もなしに客体を限定化し，無限に分析する結果，客体は実体を奪われ観念的記号の断片となるか，中心を失い無限に外周に拡がりゆく拡散的生成として把握されるに到る．この客体の統合の中心となるべき主体も又，客体との関連によって無限に寸断され，時間の流れの中に次々と失われて行く断片的非連続的自我しか見出す事は出来ない。

主体と客体とのこのかい離の克服，主体の本質である統合性の回復，それがProustが生涯を通じて追求した問題であり，*A la Recherche du Temps perdu* を書くことで解決されたといえよう．この小論は，Proustが如何にして統合性を回復したかを，第一部で彼固有のイマージュの意味の中に，第二部で作品構造の中に探ることにある．尚，枚数の関係上，ここでは彼の統合性回復を解明するのに最も重要と思われる四つのイマージュをとりあげるにとどめる．

第一部，「失われた時」と「見出された時」を表わすイマージュ．

(1) 幻燈 (la lanterne magique)

Proustにとって，現実は時間の流れの中に揺れ動く，非連続な不確実な世界であった．その世界は幼ない頃，彼の部屋の壁に写された幻燈の影に似てい

る.

「幻燈の映写が原板の変わる毎にゆらめきながら次から次へと移って行く様に，忘却によって瞬間瞬間に呑まれて行く現実は，前のものが常にあとのものに取って代わられ消え失せる[1].」

時間と空間の中ですべてがゆらめく，「幻燈の映写よりも非現実な[2]」この世界にあっては，人は自分自身の中に固定性とよりどころを持つための手段を見出さなければならない．だが自己も又，時間の中で絶えず統一を失い，幻燈の映写が次々と移る様に，前の自我は絶えず後の自我と交替し死んで行く．

「「私の可愛い子」と叫びながら，アルベルチーヌに接吻した瞬間，姿見に私の切ない情熱的な表情が写っているのに気づいた．今は忘れてしまったジルベルトの傍で，かってはきっとそうだったに違いない様な，何時かアルベルチーヌを忘れてしまった時，別の女性の傍でそうあるに違いないその表情…[3]」

Proust の世界は，幻燈のイマージュによって象徴される様に，不動性を持たない瞬時の世界であり，総ては時間の中に失われて行く．

(2) 地層 (le gisement, le terrain)

この揺らぐ世界に対置される不動の世界を，Proust は既に経験したことがある．それは，客観的認識や習慣に損われることなく，外界の統一性，不変性を完全に信じ切ることの出来た幼年期に於てである．この幼年期の絶対の信頼感で支えられた世界は，不動性と実在性を与えられ，時間の流れから引離されて彼の中に永久に定着されている．

「やがて野ばらにあとをゆずろうとして生垣ぞいに密集するさんざしの匂い，小道の砂を踏んで行く反響のない足音，水草にあたる川水に結ぶかと見えてはかなく消え去る泡 (…) そんな風景の小片は，時々あらゆるものからぽっつりと切離されて，私の想念の中を，まるで花咲くデーロスの島の様にあてもなく漂い，どんな国から，どんな時代から—恐らくは単に，どんな夢から—それがやって来たのか私には云えないことがある．だが私は，とりわけメゼグリーズの方やゲルマントの方の事を，私の精神の土壌の深い地層，今も尚私がよりどころとする堅固な地盤と考えないではいられない．この二つの道で知った事物や人々丈が今でも私にとって真面目な存在の様に思われ，喜びの種であるわけ

は，その二つの道を歩き廻っていた頃に，私がそうした事物や人々を信じていたからに他ならない．創造する力としての信仰が今は私の中で涸れている為か，それとも現実は記憶の中でしか形成されない為か，今日始めて目にする花は，私にとって真実の花ではない様に思われる[4]．」

Proust は幼年期のみが真の実在を有し，同時に今日眼前に開ける世界に実在性を与える可能性を持っていると信じる．この幼年期は，「花咲くデーロスの島」の漂うイマージュ，即ち時間の中に揺れ動く世界の断片とは相反する位置に立つものであり，堅固な地層のイマージュによって象徴されている．

だが，「地層」の語が示す様に，この幼年期は彼の奥深くに埋もれて，彼によればこれを堀起し得るものは，現在の感覚を契機として無意識的によみがえる回想行為丈である。その完全な形があの有名なプチット・マドレーヌの挿話に見られる無意志の記憶である．

話者は，プチット・マドレーヌを浸したお茶を飲む時，その味覚がかって幼少時代コンブレで味わったのと同じ味覚であることを思い起す．そしてその味覚からひき起された回想に想像力が働いて，コンブレが完全な形で彼の中によみがえる。

「今や，私達の庭の花と云う花，スワン氏の庭園の総ての花，ヴィボンヌ川の水蓮，それに村の善良な人達も彼等のささやかな住居も教会堂も全コンブレも，その近郊もこうした総てのものが，形をそなえ固定して町も庭ももろ共に私の茶碗から出て来たのだった[5]．」

このコンブレは，断片化させる時間作用を受けない超時間の中のコンブレであり，しかも現在の感覚によって堀起された過去の地層と結びつき，デーロスの浮島の様に最早漂う事なく，総てが結ばれ「形をそなえ固定して」彼の心の奥底から立ち現われる．

この様に「見出された時」は超時であり，現在と過去との結合から生まれ，基盤として過去が有していた実在性を獲得している．だが，「見出された時」の基盤は必らずしも幼年期の経験ばかりではない．先にあげた引用 4 の最後「現実は記憶の中でしか形成されない為か（…）」でわかる様に，Proust は単なる過去の回想の中にもそれを見出している．

「我々は自分の生活をあまり上手には使わない．夏のたそがれとか冬の気配を早目に感じさせる夜とかの中に，平和や喜びが幾らかこめられていたかも知れなかったとあとで思われる時間を，未完成のままにして，置き去りにする．しかしそうした時間は絶対に失われてしまったのではない．新しい喜びの瞬間が立ち代わり現われて歌声をあげる時—これも又同じ様に，やがてはかぼそい線となって消えて行くのだが—かっての時間はこの新しい喜びのもとにやって来て豊かなオーケストラが作られる基盤やよりどころを与えるのである[6]．」

初めは未完成なか細い線となって消え去る瞬間が場合によっては失われる事なく，かって自分自身が持っていなかった実在性を与えにやって来，現在と一諸になって豊かなオーケストラの完全な時を作るのは何故だろうか．確かに Rroust にとって現在は揺れ動き不確実である．だがひとたびこの現在が過去になり，完全性を目指す想像力がそこに働く時，過去は実在に達し現在と共に完全な時を作る．

従って不動性，恒常性を示す地層のイマージュは，絶対の信頼によって実在性を付与された幼年期を表象し，Proust 的世界の動揺を表わす幻燈のイマージュに対比されると同時に，「見出された時」の基盤として働く過去を象徴している．

(3) 壺 (le vase)

こうして見出された此等の時は，マドレーヌの挿話の最後で，Proust がコンブレの蘇生に与えている，水に浸すや大きく拡がる水中花のイマージュが表象している様に，無限に拡がる力を有する．自在に膨張したり縮少したりする力を持つ魔神が中に閉じこめられている壺であるかの様に，Proust は「見出された時」を壺のイマージュにたとえている．

「一時間は只の一時間でなく，匂い，音，計画，風土などで満ちた壺なのだ[7]．」

「見出された時」の各々は，最早幻燈のゆれ動く影ではなく，時や空間の圧制から免れ，Proust の精神の中に閉じこめられた壺である．

「極めて簡単な身振りとか行為とかが，封じられた無数の壺の中にはいった様に閉じこめられたままで残り，それ等の壺の一つ一つには，絶対に他と異な

る色や匂いや気候を含むものが一杯につまっている．しかも，単に夢に於てであれ思想に於てであれ絶えず我々が変化して来たその年月の高さに配置されているそれ等の壺は，みな夫々に違った高度に位置していて，我々に変幻極まりない大気の圏層の感覚を与えるのだ[8]．」

特別なもの，互いに相容れないものを閉じこめている壺は，違った高度に位置しそれぞれ孤立している．

「同じ一日の一回きりの散歩に決して二つの方向へ行ったことがなく，或る時はメゼグリーズの方へ，或る時はゲルマントの方へ行くと云う私達一家のそのような習慣が，二つの方向を引離し，双方を不可知の状態に置き，別々の午後と云う互いに連絡のない封じられた壺の中に，いわば閉じこめていたのであった[9]．」

従って「見出された時」の各々を象徴する壺は，自己の中に無限の可能性を有しているが，時の絶えざる流れに従って互いに連絡もなく離れて位置している．

(4) 天体と宇宙 (l'astre et le cosmos)

此等の「見出された時」は異なる壺の中に永久に閉じこめられたままなのだろうか． Proust が此等の「見出された時」を回想の暗喩的作用によって結び合わせ，時の継起する総ての面を同時に所有出来る様に統合性を目指した事は，天体や宇宙のイマージュによって知られる．何故なら Proust は天体や宇宙のイマージュの中に完全性を見出しているからである．

欲望による熱狂，アルコールによる酩酊は，一瞬話者に自分が完全な世界に達したと云う幻覚を与える．この時，接吻しようと身をかがめた話者の目に，アルベルチーヌの丸い顔は「燃える天体の自転」の様にうつり，レストランで食事をしている人達の光景は，酔っている彼の目には宇宙そのものの様に見える．

「めまぐるしい動きは固定して，総て落着いた調和を見せてくる．無数に集まってレストランを満たしている円い食卓を，私は昔の寓意画に描かれている遊星の様に眺める．しかも或る抗しがたい引力が此等の様々な遊星間に働いている (…)[11]」

一方，話者が現在時の快楽に身を委ね，「見出された時」を作る過去を見失ってしまう時，Proust はそれを「天体の蝕の様に一時姿を隠した私の過去[12]」と表現している．又「見出された時」は「その光輝で我々を盲目にする[13].」と云う様に，「見出された時」は完全性を有する天体にたとえられている．

「見出された時」を結び合わせて Proust が得た統合性は一つのイマージュの中に集約されてはいない．だが彼はコンブレ・ドンシェール・リヴベルの各々の回想の中に「素材の同じでない異なった宇宙の間に存する距離[14]」を早くから感じて居り，更に *Le Temps retrouvé* に於ける Proust の次の言葉は，彼が把握するのに成功した統合性を，天体或いは宇宙のイマージュが暗示していると推論してよいのではないだろうか．

「やがて私が聖堂の内部に刻みつける積りである数々の真理を把握した事に好意を寄せてくれた人達でも，私に祝意を表してくれたのは，そうした真理を私が≪顕微鏡≫で発見したと云う点であった．ところが私は顕微鏡で見つけたのではなく，望遠鏡を使って遥か遠くにある為に，実際に極めて小さく見えるもの，然し夫々が一世界をなしているものを認めたのである.[15]」

Proust が把握した統合性は，無数の天体から構成されている宇宙の様に，無数の「見出された時」の総和でありその各々の「見出された時」は完全であり，それらの間には緊密な連帯関係が存在する．故に作品全体が「見出された時」を表わすメタフォールであり，これを明らかにする為には作品構造を研究せねばならない．

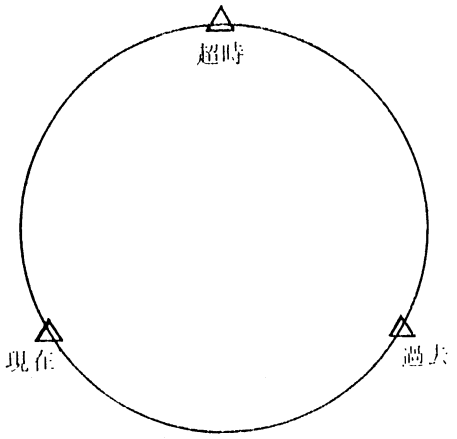
第二部「見出された時」を表わす作品構造

最初に「見出された時」の構造を見てみよう．もう一度プチット・マドレーヌの挿話に帰るとすれば，話者はマドレーヌを浸したお茶を飲む．するとその味覚が，昔コンブレで味わったお茶の味覚を呼び起す．そこから想像力の働きによってコンブレの時代が，日常の時間の中から切離されて，独自性を持って話者の中によみがえる．この場合，現在と過去の異った二つの時をつなぐ媒体は共通な二つの味覚であり，それは共通な性質によって二つの異なった事柄が結びつけられるメタフォールの構造と同じである．このよみがえったコンブレ

は，過去でも現在でもない超時であり，これは現在と過去をつなぐものであると同時に現在と過去とに独自性を持たせる契機である．

こうして現在と過去，その二つの時から生じた超時の三点は，各々互いに依存し合っている故に，意味がサークルとなって循環している．このサークルを構成しなければ，現在，過去，超時の時間は総て失われる．（図1）

（図1）



もしこの小説全体が，その題名の様に「失われた時」をよみがえらせようとする試みとすれば，このサークルの図式は小説構造に於てどの様に現われているだろうか．

Proust が小説構造に非常な努力を払った事は書簡などからよく知られているが，その構造が読者や批評家達に理解されない事を恐れて，機会ある毎に説明を試みている．特に

「実際，人々は私の作品が構築をなしている事をよく知っていません．私がすべてを捧げたこの構築は，見極めるのにかなり長くかかります．でも *Le Temps retrouvé* の最後の頁が *Swann* の最初の頁に閉じられるのを見ると，誰もこの構築を否定しないでしょう[16]．」

と云う Proust の言葉は構造を解明する上に重要であると思われる．では彼のこれ等の言葉は何を意味しているのだろうか．

小説は下記の様に七篇から構成されている[17]．

Du ctôé de chez Swann

A l'ombre des jeunes filles en fleurs

Le côté de Guermantes

Sodome et Gomorrhe

La Prisonnière

La Fugitive

Le Temps retrouvé

最初の篇 *Du côte de chez Swann* 第一部 *Combray* と最後の篇 *Le Temps retrouvé*[18] に，二つの時即ち「時」と「超時」の経験が対置されているのを注目せねばならない．

まず，「時」の経験から *Combray* は始まる．パリの話者の寝室に於て，目覚めぎわに感じる不確実さの故に，話者の周囲で土地や時が旋回する．子供時代の部屋，土地，生活の回想が次々に浮かんで来るがいずれも断片的である．これは時間の流れの中に総てが失われる「時」の経験である．

この「時」の世界の中で喜びもなく不安な日々を過す話者に，突然，恍惚の瞬間が訪れる．マドレーヌのお茶から，かってのコンブレが完全な形でよみがえったのである．冒頭の断片的な日常の「時」の経験に対して，このお茶の経験は「見出された時」即ち「超時」の経験であるが，その意義はまだ話者にはわからない．

最後の篇 *Le Temps retrouvé* は *Combray* と同じく時の相反する二つの経験から構成されているが，今度は *Combray* の経験に対する解答と云う形で捉えられている．即ちゲルマント大公妃邸に於ける不揃いな敷石，匙の音，糊のついたナプキン等によって次々にひき起された無意志の記憶の恍惚感の中での「超時」の意義の発見，続いて，何年も出会わなかった人達が時の流れの中に変貌しているのを見，時がその断片的性格にも拘わらず時間的空間とも云える深さを有している事を知る「時」の発見，此等二つの時の経験は明らかに *Combray* の二つの時の経験に対称して置かれている．ゲルマント邸に於ける「超時」の発見は，冒頭の「超時」の暗示であるマドレーヌの恍惚に答え，同じく「時」の発見は，冒頭の「時」の不確実，不連続性を示す目覚めの不安な経験に対応している．（図2）

（図２）

Combray

目覚めの経験　　マドレーヌの恍惚の経験

⋮　　⋮

「時」の発見の経験　　「超時」の発見の経験

Le Temps retrouvé

小説の冒頭に配置された「時」と「超時」の経験から小説の中の挿話を辿って，話者は最後に二つの時「超時」と「時」の発見に達する．そして話者は作品を，「時」と「超時」の発見の暗示である *Combray* から書き始めた為，小説の最後は冒頭に重ねられる．終りが，最初に閉じられるこの小説構造から，小説全体は円環を閉じている．（図３）

（図３）

Combray（出発点）

目覚めの経験　⟶　マドレーヌの恍惚の経験

↑　　↓

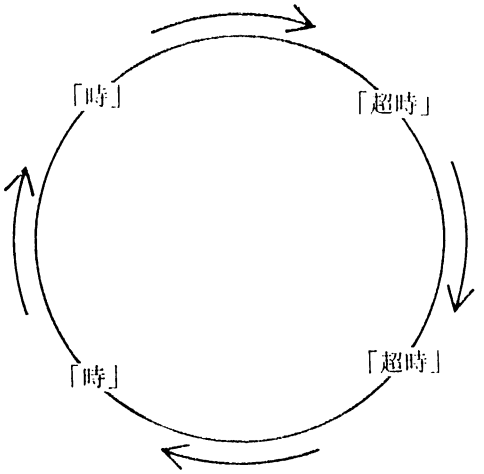
「時」の発見の経験　⟵　「超時」の発見の経験

Le Temps retrouvé（到達点）

出発点 ＝ 到達点

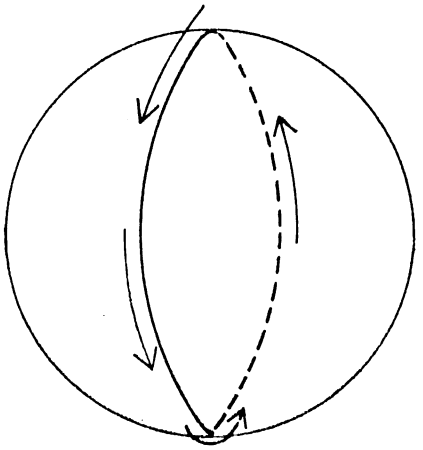
従って，小説は図４に於て矢印が示す様に循環運動を現わしている．

（図４）



小説のこの円形構造は，図1に於ける現在，過去，超時が作る構造に一致している故に，小説は「見出された時」に最後に到達する運動を描いていると考える事が出来る．更に小説は時の深さの次元を有している故に，その構造は循環運動を有した立体である． Proust が「見出された時」を壺のイマージュにたとえている事実を考慮して，小説が一つの球体を描いていると仮定してみよう．その場合，循環運動は，例えば図5の様に球の中に見出される．

（図5）



出発点 *Combray* と到達点 *Le Temps retrouvé* の間にはさまれた他の篇は，二つの異なった時の発見への話者の長いさまよえる道程である．この道程は二つの部分に分けられる． Combray に於て幼ない話者は，父や祖父と共に方向の反対な二つの道を散歩する習慣があった．或る日は「スワン家の方」に，或る日は「ゲルマント邸の方」に．この二つの相反する散歩道は小説の中で発展し，前者は *Un amour de Swann*, *A l'ombre des jeunes filles en fleurs*, *La Prisonnière*, *La Fugitive* をとおして話者を愛の道へと導き，後者は *Le côté de Guermantes*, *Sodome et Gomorrhe* をとおして彼を社交界の道へと導く．

「スワン家の方」の部分ではスワンとオデットとの恋，話者とジルベルト，或いはアルベルチーヌとの恋等，スワンと関連して様々な恋が展開される．此等の愛の経験の中で話者は，統合性を把握する事の不可能と，自我の断片的，継起的死を知る．

「我々が愛だとか嫉妬だとか思っているものは，絶対に分つ事の出来ぬ継続した単一の情熱ではない．それ等は無限に継起する愛，無限に異なる嫉妬から出来ているので，夫々は一時的なものなのだが，多くのものがとぎれずに交互に現われる為に続いている様な印象，単一である様な錯覚を起させるのである[19].」無限に継起する自我によって把握されたオデット，ジルベルト，アルベルチーヌは，常に分割された断片的存在でしかない．

更に此等の恋愛には必ず芸術家或いは芸術作品が結びつけられている事に注目せねばならない．愛される女性と芸術との絶えざる対置——オデットとヴァントイユのソナタ，アルベルチーヌとエルスチールの海の絵，ついでヴァントイユの七重奏曲——は一つの意味を表わしている．それは愛が持つ断片的不連続的「時」と，芸術が持つ「超時」との闘いであり，この闘いの変遷は，話者の異なる二つの時の発見への軌道を形成している．話者は芸術家達との出会いによって，芸術の超時性に目覚めながらも，まだ愛即ち「時」に囚われている．だがヴァントイュの七重奏曲を聞いて，芸術は生活や恋愛よりも一層実在性を有し，全く別の範疇に属する事を悟る．

「アルベルチーヌの愛よりも，もっと神秘的な何ものかがこの曲の始めのところ，れい明の最初の叫びの中に約束されている様だった（…）[20]」

最早そこには，時間と死に身を委ねた不連続な自我は見られない．

「一種特別な歌，その歌の単調さは——どんな主題を取扱っても彼自身に何処迄も一致して行くのだから単調になるのであって——彼の魂の構成要素が確固不動である事を証明している[21]」

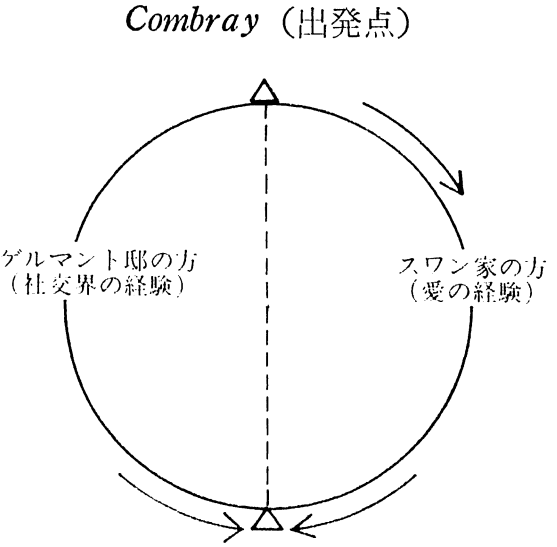
愛と芸術，「時」と「超時」はこの様にして闘い合い，七重奏曲によって呼び起された超越的な喜びの前に，「偉大な時の女神[22]」のアルベルチーヌは消え去る運命にある．こうして最後の「超時」の啓示と，芸術作品に着手する話者の決心が準備される．

一方，「ゲルマント邸の方」は何如なる軌道を示しているか．話者はヴィルパリジス侯爵夫人やサン・ルー侯爵と知り合い，幼ない頃から憧れていたゲルマント家の社交界に迎えられる．第三篇 *Le côté de Guermantes* 第四篇 *Sodome et Gomorrhe* は様々な種類の社交界の人間の登場で豊かであるが，これも「超

時」に対置される不連続な破壊的「時」である．後になって話者が気づく様に，社交界は彼にとって虚無の王国であり不毛の土地であった．社交界は一つのわなであり，創造の天職を持つ者には死の状態をはらんでいる．話者はヴィルパリジス侯爵夫人と馬車で散歩した時，馬車から眺めた三本の並木が突然何かを彼に啓示するが，彼はその隠された真理を把握出来ずに通りすぎてしまう．この軌道では，ソドムとゴモラの同性愛の不毛性が暗示している様に，深い回想の恩寵は極端に少ない．それは砂漠を横断する旅でもある．

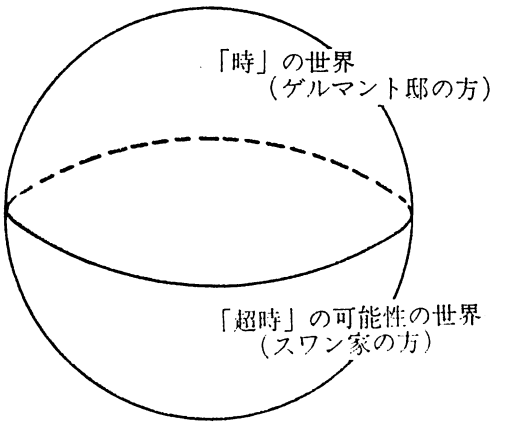
*Combray*の二つの散歩道から出発した「スワン家の方」と「ゲルマント邸の方」は，*Le Temps retrouvé* に於て，スワンの娘ジルベルトとゲルマント侯爵の甥サン・ルー侯爵との結婚によって生まれたサン・ルー嬢が登場する事によって一つに合致する．（図６）

（図６）



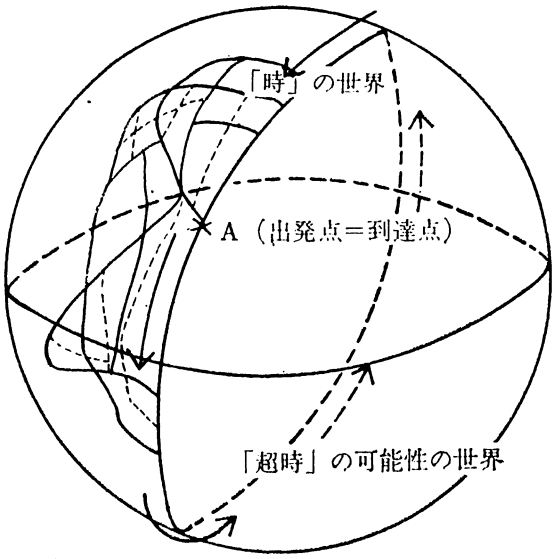
先に，小説が一つの球体を形造ると仮定したので，此等二つの「方」は二つの半球に相当する．（図７）

（図７）



愛も社交界も共に不連続で間歇的「時」の経験であるが，「ゲルマント邸の方」が常に破壊的「時」の中にあり「時」の世界を表象しているのに反し，「スワン家の方」は「超時」の発見への話者の進歩を表わしている．図７と，小説の循環運動を表わす図５を合せるなら下記の図が考えられよう．（図８）

（図８）



「時」の世界に於ける目覚めの経験（任意の一点A）から出発した小説は，「超時」の可能性の世界で，マドレーヌの経験，「超時」の発見ついで「時」の世界での「時」の発見を経て，そこに再び戻ってくる．他方，二つの半球の間に設けられている無数の横断線[23]は，細かい網の目の様にこの循環運動の軌道と複雑にからみ合い，球を構成する無数の軌跡を描いている．従って *A la*

Recherche du Temps perdu の構造は途方もなく大きな半径を持った球であり，それは二つの半球から作られ循環運動を有していると考える事が出来る．

さて，第一部で取り上げた「失われた時」と「見出された時」を表わすイマージュと，この小説構造とは如何なる関係にあるだろうか．「時」の世界の半球は「幻燈」のゆれ動く瞬時のイマージュによって象徴され，「超時」の可能性の世界の半球は，恒常性と不動性を有する「地層」のイマージュを内にひめている．そして「見出された時」の各々は，「壺」のイマージュにたとえられていた故に，此等の「見出された時」を無数に含んで構成されている小説は，球形の大きな「壺」であり，同時に内部に小さな「壺」がつらなり合っている有機体である．内在する無限と循環運動を有する「見出された時」は既に見た様に，小説の中で緊密な連帯関係を獲得し，此等三つの特質から宇宙を構成する「天体」と考えられる．従って小説構造は，第一部に於て「見出された時」の完全性，統合性を暗示していると仮定した「天体」又は「宇宙」のイマージュに相等する．それ故に小説全体を表象している構造と，統合性を表わすイマージュは，完全に平行をなしていている．

結　　論

時間の流れの中で散乱し失われる「時」の代りに，Proust が見出した「時」即ち「超時」は，第一部，第二部で見た如く，或る共通な感覚によって結ばれた二つの「時」，現在と過去とから作られる．この場合，二つの「時」は「超時」への契機であるが，同時に，「超時」につながる事によって実在性を得る．一方「超時」も又，Proust に於ては，「時」に結ばれねば，その本質的存在を失う．こうして，現在・過去・「超時」の三つの時は，時間の流れの中で意味的な循環運動によって相互に依存して始めて統合性を得る．この統合性こそが彼の芸術の本質である．この統合性への実現過程は，小説の中で Proust 固有のイマージュをとおしてよく理解する事が出来るが，同時に小説構造も又彼の統合性把握を証明している．芸術は，精神的世界と知覚し得る構造，即ち内容と形式の連帯性の中になければならない．イマージュは内容を表わし，構造は形式を表わす．*A la Recherche du Temps perdu* では，内容と形式はコレ

スポンダンスによって緊密な関係を保ち，Proust の芸術の次元の深さと，彼の芸術の本質である統合性をここからも証明する事が出来る．

注

1) Marcel Proust, *A la Recherche du Temps perdu* (éd. de la Pléiade) Ⅰ, p.820.
2) *Ibid.*, Ⅰ, p. 48.
3) *Ibid.*, Ⅲ, p. 76.
4) *Ibid.*, Ⅰ, p. 184.
5) *Ibid.*, Ⅰ. p. 47-48.
6) *Ibid.*, Ⅱ, p. 396.
7) *Ibid.*, Ⅲ, p. 889.
8) *Ibid.*, Ⅲ, p. 870.
9) *Ibid.*, Ⅰ, p. 135.
10) *Ibid.*, Ⅰ, p. 934.
11) *Ibid.*, Ⅰ, p. 810.
12) *Ibid.*, Ⅰ, p. 815.
13) *Ibid.*, Ⅲ, p. 912.
14) *Ibid.*, Ⅱ, p. 398.
15) *Ibid.*, Ⅲ, p. 1041.
16) Jean Rousset, *Forme et signification* の中で引用された Proust の書簡. p. 138.
17) *A la Recherche du Temps perdu* は，始め三巻の予定であったが，戦争の為第二巻以下の出版が延期され，その間大幅に加筆され，膨脹し，今日の体裁に到っている．だが「最後の巻の最後の章は，最初の巻の最初の章のあとですぐ書かれた.」と Proust があとで語っている様に，小説の最初の章と最後の章の構造は，始めから Proust が意図していたものであり，殆んど変更されていないと云える．
18) *Le Tempe retrouvé* は第1部 *Paris pendant la guerre* と第2部 *la Matinée Guermantes* から成っているが，第1部は後に加筆されたものであり，Proust の云う「最後の巻の最後の章」は第2部に相当する．従ってこの小説構造の研究に於ては，*Le Temps retrouvé* は常に第2部 *la Matinée Guermantes* を指す事とする．
19) Marcel Proust, *A le Recherche du Temps perdu*, Ⅰ, p. 372.
20) *Ilid.*, Ⅲ, p. 254.
21) *Ibid.*, Ⅲ, p. 257.
22) *Ibid.*, Ⅲ, p. 387.
23) 二つの半球「ゲルマント邸の方」と「スワン家の方」の間には，さまざまな挿話

によって無数の横断線がかけられている．例えば，スワンは「スワン家の方」の主要人物であるが，同時にゲルマント家の社交界に出入りし，二つの「方」の人物を緊密に結び合わせている．

参考書

Poulet, Georges. *Etudes sur le Temps humain*, Plon, Paris, 1950.
L'Espace proustien, Gallimard, Paris,
Rousset, Jean. *Fome et signification*, Corti, Paris, 1964.
Sartre, Jean-Paul. *L'Imaginaire*, Gallimard, Paris, 1948.
Picon, Gaëtan. *Lecture de Proust*, Mercure de France, Paris, 1966.
Bolle, Louis. M*arcel Proust ou le complexe d'argus*, Grasset, Paris, 1966.

（旧姓　三宅．D．在学中）